

幕末維新期の「外庄」と和泉木綿

I 学説整理と本稿の課題

幕末・維新期の「外庄」とそれにもなる国内綿織物業の再編成については、これまで枚挙にいとまのないぐらい議論がたたかわされてきたが、現在の学界の水準としては、輸入綿布の「外庄」への対抗を輸入綿糸の導入による国産綿布の低廉化とそれに伴う在来綿織物業の再編成に求める古島・中村・高村説^{〔1〕}と、国産綿布と輸入綿布の使用価値の差異から輸入綿布の「外庄」そのものを否定する川勝説^{〔2〕}、川勝説を部分的には認めつつも当該期の国内市場の拡大が輸入綿布の「外庄」を吸収したとする谷本説^{〔3〕}との論争になっていると概括してもよいだろう。しかしながらこの論争も、解決の糸口が見出せないままに、早一五年以上の月日がたつてしまっている。そこで本稿では、当時国内有数の綿織物（白木綿）産地であり、輸入綿

布によるかなりの「外庄」を受けたとされている大阪泉州地方の綿織物業について、主に品質と価格の両面から若干の考察を加え、この論争に一石を投じたいと思う。

久米 高史

まず、川勝説の持つ意義とその問題点に触れておくことにしたい。川勝平太氏は、「明治前期における内外綿布の価格」において、国産綿布と輸入金巾との価格差を比較・検討し、その価格差が明治中頃までわが国にとって不利であり続けたという事実から、輸入綿糸を導入して国産綿布が輸入品よりも低廉に供給できるようになった結果、輸入防遏^{ぼうあつ}が可能になったのだ、とする通説を一蹴した。さらに氏は、続いて「明治前期における内外綿関係品の品質」において、国産綿布は低番手の太糸で織られた堅牢な厚地布であるのに対し、輸入綿布は高番手の細糸で織られた薄地布であり、その多くが絹織物の下級代替財として着物の裏地に用いられたと論じ、両者の使用

価値が異なっていたから競合関係にはならなかったと結論づけた。

かくして川勝氏は、輸入綿布による在来綿織物業への「外庄」を完全に否定することによって通説を真っ向から批判したのであるが、これに対し高村直助氏は、「維新前後の『外庄』をめぐる一、二の問題」において、大阪商法会議所の明治一二年「海関税改正に関する答申書」を引用しつつ、川勝説に対する反批判を行った。その要点を簡単に示そう。

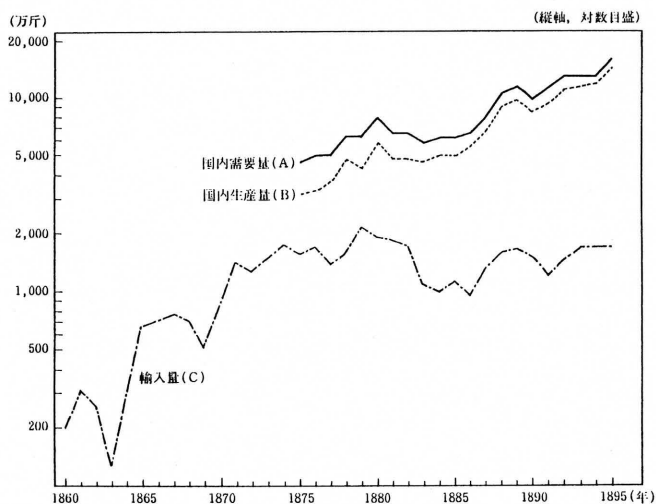
この答申書の「中等金巾」の項目を正確に読み取れば、当時一反当たり二三〜二四銭の相場であった中等金巾は、洋銀相場が、従って紙幣表示の価格が、六割上昇するまで（すなわちその価格が三七〜三八銭になるまで）は売行不変で、それ以上になると伯州木綿一反当たり四八銭物に販路の一部を奪われるというのである。つまり、品質の問題はさておき、両者の価格差が一〇銭以下に縮まらない限りは、伝統的嗜好よりは安価の方が優先されるといふ、一種の不完全競争が実在していたというのである。ちなみに、価格差が「一〇銭以下」という数字は、後述の関係で注意を促しておきたい。

このように高村氏は、品質上の差異を一面的に強調して、価格如何によっては代替関係が存在したことを軽視すべきではない、と川勝説に対して的を射た反批判を行ったかに見える。だが、高村氏は当初は品質の差異を無視して完全競争説をとっていたのであるから、この点では高村氏は川勝氏の使用価値説を認めたのである。このこ

とは確認しておかねばならない。しかしながら、その後この議論に決着がつかなくなってしまうのは、議論の中心が史料に登場する「必的」「代用」といった字句の解釈に移ってしまったからである。

その結果、川勝氏の方法論上の問題点の追究や、史料に見られる絹織物との代替関係の検討が顧みられなくなった憾みがある。

川勝氏の方法論上の一つの問題点について、その後谷本雅之氏によって次のような指摘がなされた。以下それを引用すると、「……川勝氏は、明治一〇年代の輸入綿布価格（生金巾）と在来綿布価格（三河白木綿）を比較し、在来綿布価格が依然として輸入綿布価格を上回っていたことから、国内綿布市場防遏の要因は在来綿布価格の低下ではなく、内外綿布の品質の相違―厚地布と薄地布―、その背後にある需要構造の差異にあったことを主張している。この川勝氏の見解は、従来検討が手薄であった使用価値の側面を指摘している点、興味深い分析と言えよう。しかし、品質の差異は、綿布輸入開始当初から一貫して存在するはずで、この論点のみでは、第一図（注：ここでは図1として再録）に見られる輸入綿布の動態を説明することは困難であろう。川勝氏は、輸入綿布を在来綿布ではなく在来絹布の代替財（下級代替財）と捉え、所得の上昇↓在来絹布への需要転換↓輸入綿布の減少という脈絡を想定しているが、綿布輸入はインフレ期の明治一〇〜一二年に増大し、デフレ下の明治一〇年代後半にかけて減少傾向を示しており、綿布輸入の動向を在来絹布



(出所) 中村哲『明治維新の基礎構造』未来社、1968年、付表より計算。

(注) $A=B+C$ - 輸出量。繰繰換算。上記の付表では国内需要量・生産量が1874年以前についても推計されているが、そのもとになる国内綿花生産量の推計がほとんど史料の得られない中でなされているため、ここでは取り上げない。

図1 国内綿布需要の推移

との関連で説明することには成功していない。輸入綿布の一部が在来綿布と代替関係にあったのは事実であるが、綿布輸入の動向は在来綿布との関連において把握されるべきであろう。その際、品質の差異―需要構造の問題―を静態的に論ずるだけでなく、綿布国内市場の展開と関連させた、動態的な把握が要請されていると思われる。」

この谷本氏の指摘を手掛かりとしつつ、川勝氏の方法論上の問題を点を探ると、次のようになると思われる。まず、川勝・高村・谷本

三氏が共通して依拠している中村哲推計⁽⁵⁾によれば、輸入綿布の国内綿布市場占拠率のピークは明治七(一八七四)年であり、以後輸入綿布の国内綿布市場占拠率は減少して行くことから、「外庄」が最も大きかったと考えられるのは明治初年代であり、この期間における輸入綿布と国産綿布の価格比較を行うべきであったということ、そして三河木綿と生金巾との使用価値Ⅱ品質の差は明確であるから、使用価値の問題にして論じるのであれば、やはりその比較は、比較的品质・用途の似た伯州木綿と中等金巾、泉州木綿と下等金巾で行うべきであったこと、の二点に集約できよう(ただし、川勝論文が出る前にあっては、使用価値(Ⅱ品質の差)の相違から「外庄」を検討するとう方法論はなかったわけであるから、三河木綿と生金巾との品質の差異が自明であったとする谷本氏の見解は、川勝論文によって初めて自明のものになったことは指摘しておかねばならない)。

そこで本稿では、谷本氏の指摘を踏まえて、比較の対象を輸入生金巾と泉州白木綿に取る。以下ではまず、両者の使用価値(Ⅱ品質の差)について検討を加えた上で、次に価値的側面の検討として、両者の価格分析を行うことにする。さらに泉州木綿の市場についても最後に簡単に触れる。

Ⅱ 輸入生金巾と和泉木綿の品質

幕末から明治初年にかけての泉州地方の製品は、『泉南織布発達

史』によれば、白木綿は「泉風」と称される特徴をもち、太口と細口の二種類が存在した。その生産地域名により山直木綿と呼ばれた比較的厚手のものが「太口」で、主として手拭地、晒地に用いられ、吉見木綿と呼ばれた薄手のものが「細口」で、主として紅地（着物の裏地）に用いられた⁷。もっとも、これらはもっぱら泉州南部に於いての記述であり、泉州北部の製品については若干品質が違うとも言われている。そうした違いを含みつつも、泉州の木綿の一般的特徴は「地薄方ニ而多分者紅地・手拭地等に相成候⁸」というものであった。そこで本稿では、泉州木綿全体を一括して「和泉木綿」として扱う。

このうち「細口」のものは、国産綿布の中ではかなり薄地の部類に入るものであり、先の大坂商法会議所の答申に「下等金巾は着物の裏地に用いる」とあるが、細口の和泉木綿が同一の用途とみられる。しかし、同一の用途であったからといって、品質まで同一であったとは言えない。明治三十九年の『内地向・輸外向織物製造法』によれば、泉州木綿のうち、裏地に用いるものは緯糸・経糸共に二〇番手の綿糸を一寸の間に七〇本前後打込んだものであり、中形地（浴衣地の一種）に用いるものは緯糸・経糸共に二〇番手の綿糸を一寸の間六〇本前後打込んだものであり、手拭地に用いるものは経糸に二〇番手の綿糸を一寸の間に五六〜七二本程度打込み、緯糸に一〜一六番手の綿糸を一寸の間に五六本程度打込んだものである。

これに対し、金巾の方は、上等・中等・下等の区別は判明しないが、緯糸・経糸共に二八〜四〇番手の綿糸を一寸の間に八四〜一〇八本程度打込んだものである⁹。明治三五年『外国貿易概覧』にも、日本に輸入された舶来の生金巾の場合、「縦糸は二八番より三八番横糸は三〇番より五〇番のものを用ひ」とある。これらの数字からはイメージが湧きにくい¹⁰が、裏地に用いるもの同士で比較すると、目の粗さでは和泉木綿と生金巾とはさほど変わらず、生金巾の方が糸が細いわけであるから、生金巾の方が耐久性という点でかなり劣ることが容易に理解しうる。この事実は、英国領事報告における「中略」生金巾は生地のいたみがひどく一回の洗濯もきかない。それで裏地に使用してすり切れてしまえば、家庭用にも使えなくなる¹¹」との記述によっても裏付けられている。

すなわち、同一の用途といえども、輸入生金巾と和泉木綿の間には明らかな品質の差（つまり裏地として用いるには輸入生金巾の方がかなり質的に劣る）が存在したのである。和泉木綿は、大坂や京都を市場とした他、江戸後期以来大坂南部（堺・岸和田・泉佐野など）にやって来るようになった北前船の帰り荷として、主として北海道や北陸・東北の田舎を市場としていた¹²。伝統的需要構造をもつこれらの地域において、消費者が単純に価格差の度合いによっては金巾購入に全面的にシフトしたとは、とうてい考えにくい。

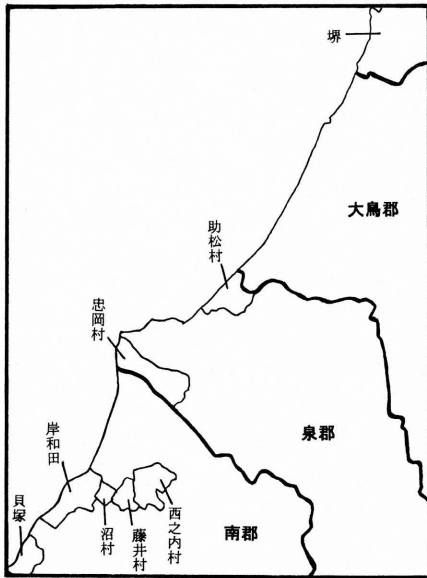


図2 藤井村・忠岡村・助松村の位置（注：日根野村は現在の泉佐野市になり、この地図のもう少し南になる）

まず、価格分析に用いる史料について説明しておこう。明治元年～四年については岸和田市郷土資料室（市史編纂室）蔵の前田家文書のデータを、明治一一年～一六年については川上雅氏の論文「明治前期泉州における木綿仲買の経営」^②所収の辻家文書のデータを、またその間を埋める参考史料として、泉南に隣接する泉北の史料としては、『泉大津市史』所収の田中家文書のデータと岡田光代氏の論文「幕末～明治前期における一農家の木綿生産」^③所収の徳兵衛家文書のデータを用いる（泉南・泉北の位置関係については図2の地図を参照）。

データ分析に入る前に、史料の性格について触れておこう。前田

III 分析に用いる史料について

家文書から以下、順に述べることにする。前田家は江戸時代後期～明治初年にかけての和泉国・南郡・藤井村の木綿仲買商である。岸和田市郷土資料室所蔵史料には、文化・文政期から明治九年にかけての家業に関する帳簿「毛綿買日記」「毛綿出入帳」「毛綿反入帳」「木綿仕切通」「毛綿上方仕切帳」などがある。ただし、明治四年以降は木綿関係の帳簿は存在しないので、理由は不明であるが、前田家はおそらく木綿商をやめたものと思われる。ともあれ、その中で連続したデータが得られるのは慶応四年（明治元年）～明治四年にかけての「毛綿買日記」である。同日記は仲買商である前田家が、機織農家をまわって綿布を買い集めた時の帳簿である。それによれば、前田家は藤井村を中心として南郡内の近隣村の機織農家を主として取引相手としており、取引規模は年間約一、五〇〇～二、〇〇〇反とさほど多くはないが、取引相手数は八〇～一〇〇人と、かなり多い（表1～3を参照）。

一方辻家は、和泉国・日根郡・日根野村の木綿仲買商であるが、川上論文によれば幕末期には泉州最大となった木綿問屋である。木綿の集荷先は、先の前田家のような仲買商と直接生産者である機織農家に大別される。その両者のデータがそろっている明治一二年の史料によれば、集荷先仲買商は一八名、その集荷量は二二、一四七反であり、集荷先機織農家の方は二〇八名に及び、その集荷量は三、八二六反である（表4・表5を参照）。表に明示されているように、

表1 前田家の取引量（全体）及び取引先別数量（村別）[単位：反]

慶応4年	2,390	藤井村：1,186	西内村：808	その他：386	不明：10
明治2年	1,828	藤井村：736	西内村：530	その他：500	不明：62
明治3年	1,324	藤井村：456	西内村：666	その他：202	不明：0
明治4年	1,808	藤井村：624	西内村：1,008	その他：90	不明：86

(注)その他に含まれるのは、下松、上松、河合、三ヶ山、木積、尾生、荒木、田治米、岸城町、北町など南郡内の村落と、隣の日根郡の日根野村

表2 前田家の月別取引量 [単位：反]、月別平均価格 [単位：匁]

	慶応4年		明治2年		明治3年		明治4年	
	取引量	平均価格	取引量	平均価格	取引量	平均価格	取引量	平均価格
1月	80	35.4	482	73.7	60	79.4	108	76.0
2月	262	39.4	132	61.2	70	76.7	246	75.0
3月	250	39.6	190	86.3	72	72.8	222	72.1
4月	138	37.4	192	85.4	64	66.6	118	63.4
閏4月	52	38.2						
5月	32	39.2	36	84.2	6	72.5	30	64.0
6月	94	44.9	12	66.7	42	70.4	32	74.4
7月	222	48.3	82	81.4	30	73.0	230	69.2
8月	218	55.3	212	94.8	86	67.0	130	64.7
9月	160	59.2	128	87.0	34	64.2	114	65.8
10月	56	55.1	34	73.1	12	66.3	74	63.4
閏10月					84	63.2		
11月	222	61.6	132	75.4	336	73.5	192	70.5
12月	610	65.0	196	77.3	408	77.2	312	73.6
合計/年平均	2396	40.1	1828	78.9	1304	70.1	1808	69.3

表3 前田家の取引先上位3位の変化

	慶応4年		明治2年		明治3年		明治4年	
	藤井村	吉兵衛 久右衛門 源六	156反 120反 102反	太助 源兵衛 利右衛門 久右衛門	86反 76反 64反 64反	彦左衛門 源六 源兵衛	60反 60反 52反	源六 吉左衛門 太助
計	29人		20人		16人		20人	
西内村	安右衛門 茂七 仁左衛門	118反 104反 74反	安右衛門 茂七 甚次	84反 40反 36反	安右衛門 甚次 善作 仁左衛門	78反 52反 48反 48反	善作 茂七 安右衛門	116反 76反 74反
計	45人		40人		42人		55人	
その他	沼村・常喜 河合・中右衛門 沼村・又七	54反 34反 22反	沼村・常喜 尾生村 沼村・花久 八坂・才次郎	58反 58反 28反 28反	沼村・常喜 沼村・伝兵衛	50反 28反	沼村・常喜 沼村・伝兵衛	42反 8反
計	46人		49人		15人		10人	

(注) 明治3年・4年のその他については、上位2位以外は取引量が極端に少ないため、省略した。
表1～3ともに、慶応4年～明治4年「毛綿買日記」より作成

表4 辻家の取引先 [小買 (木綿屋)] 上位3位とその取引量の変化 (単位: 反)

明治11年				明治12年					
	和	半唐	合計		和	半唐	合計		
内寄	1,814	1,922	3,736	辰次郎	1,538	3,376	4,914		
高郎	1,686	1,724	3,410	内寄	2,010	2,356	4,366		
喜七郎	1,640	1,200	2,840	喜七郎	1,328	1,606	2,934		
...		
年取引量全体	13,928	8,984	22,912	年取引量全体	8,965	13,182	22,147		
明治13年				明治14年					
	和	半唐	合計		和	半唐	合計		
内寄	1,810	1,844	3,654	内寄	1,940	2,946	4,886		
辰次郎	348	1,876	2,224	木伊		1,060	1,060		
長蔵	338	840	1,178	長蔵	302	840	1,142		
...		
年取引量全体	3,560	6,588	10,148	年取引量全体	2,636	5,618	8,254		
明治15年				明治16年					
	和	半唐	丸唐	合計		和	半唐	丸唐	合計
内寄	1,500	1,236	376	3,112	内寄	120	770	188	1,078
木伊	2,592				喜代松	38	582	120	740
庄三郎	46	338	92	476	寅吉	10	140	38	188
...
年取引量全体	4,222	3,224	658	8,104	年取引量全体	298	1,566	430	2,294

[出所] 川上雅「明治前期泉州における木綿仲買の経営」、p.316・表4より作成
 (宮本又次編『商品流通の史的研究』ミネルヴァ書房、1967年)。原史料は、辻家「木綿揚利帳」。

辻家文書の特徴は、明治一〇年代の史料ということもあって、購買綿布の種類が、在来手紡糸で織られた「和木綿」と、機械製紡績糸を経糸に用いた「半唐木綿」、さらに緯糸・経糸共に機械製紡績糸を用いた「丸唐木綿」に区別されているところにある。この点は安価な輸入綿糸の導入が、どの程度製品のコストダウンにつながったのか、またその結果、輸入生金巾との価格差はいかに縮まったのかを知る上で貴重である。

以上が泉南地域の木綿仲買の史料であるが、両者には明治五年〜一〇年にかけての動向を示すデータが欠けている。それを補うために、前述の泉北地域の史料を用いる。泉北地域は、近代には泉南地域とは異なった発展をみせた¹⁴⁾。とはいえ、近世から明治初年にかけてはさほど泉南地域との違いはない。また、岡田論文で扱われている泉北の徳兵衛家は、泉南地域に隣接する和泉国・泉郡・忠岡村の機織農家であり、その取引先には岸和田や貝塚の仲買商が頻繁に登場することから、その史料は泉南地域の動向を反映しているとみなすことができよう。実際、図3、表6は徳兵衛家の販売反数と販売先を示したものであるが、これらからわかるように、徳兵衛家の生産規模は明治元年〜一〇年までは一五〇〜二〇〇反前後と比較的安定しているが、取引先については明治四年以降、岸和田の仲買に特化している。

最後に、『泉大津市史』所収の田中家文書であるが、田中家は徳

表5 明治12年、辻家の農家よりの木綿購入分 [上段は日根野村・字別集計、下段は東上字より購入分の詳細] (単位:反)

種類 字	人数	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		合計		
		和	唐	和	唐	和	唐	和	唐	和	唐	和	唐	和	唐	和	唐	和	唐	和	唐	和	唐	和	唐	和	唐	
東上	32	124	22	40	76	48	122	76	164	38	62	18	26	30	28	98	112	20	78	24	56	24	34	48	18	588	798	
中筋	18	32	4	8	26	24	36	22	32	60	30	6	—	4	2	44	12	4	18	18	18	2	2	12	16	236	196	
新道出	19	22	4	10	12	10	18	2	44	38	26	8	—	10	4	4	20	—	4	4	6	—	2	—	14	108	154	
西出	23	10	4	24	10	24	32	16	38	28	20	6	14	10	20	10	10	—	2	—	2	—	—	—	2	128	154	
山出	9	12	—	4	—	18	10	18	22	22	34	4	—	—	—	24	—	2	4	2	4	—	2	—	14	106	90	
田中	7	—	6	2	—	8	14	2	16	8	10	6	—	—	4	10	26	—	4	6	12	—	10	—	2	42	104	
久之木	11	—	8	—	12	—	8	10	16	6	6	—	2	8	—	2	18	4	4	4	—	—	—	—	2	34	76	
母山	5	14	—	18	—	10	20	8	8	10	—	4	6	4	—	14	—	8	—	—	—	—	—	—	—	90	34	
浦山	5	—	8	6	2	—	26	—	6	—	32	—	4	—	—	8	—	6	—	2	—	—	—	—	—	6	94	
野口	8	6	4	—	4	—	—	—	—	16	—	8	—	—	—	10	—	—	—	2	—	—	—	2	—	12	44	
西上	8	10	—	6	—	6	4	4	—	6	—	—	—	—	—	4	2	4	4	—	—	—	—	—	—	40	10	
口出	10	—	—	—	—	—	4	—	—	4	8	6	—	6	—	6	4	—	—	—	—	—	—	—	—	22	16	
その他	15	28	20	20	—	10	16	4	38	18	8	—	4	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	80	90
不明	38	28	10	12	2	20	26	16	68	28	24	14	26	10	20	40	20	14	28	4	12	2	10	30	10	218	256	
合計	208	286	90	150	144	182	336	178	452	266	276	72	90	82	78	256	246	56	152	62	114	28	60	92	78	1,710	1,116	
九兵衛		14	—	4	18	8	20	—	38	—	22	—	8	2	4	2	26	2	12	12	—	—	—	8	—	52	148	
儀右衛門		12	—	6	—	4	12	4	18	—	2	—	6	—	16	—	38	—	26	—	8	—	22	—	—	26	148	
仲右衛門		8	—	—	12	—	28	—	20	—	10	4	4	4	—	6	16	4	10	—	10	—	4	—	—	26	114	
栄助		12	—	10	—	6	—	24	—	4	—	2	—	2	—	20	4	—	8	—	6	—	—	—	12	80	30	
弥助		2	2	4	2	—	12	6	12	—	—	—	—	—	—	8	2	—	10	—	10	—	—	—	—	20	50	
清市		12	2	—	10	—	10	2	10	—	—	—	—	—	—	6	—	—	2	—	6	4	—	—	—	24	40	
新左衛門		—	10	2	—	8	—	6	2	—	—	—	—	—	—	—	10	—	2	—	14	—	—	10	—	24	38	
口右衛門		14	—	2	—	—	—	6	—	4	—	2	—	—	—	10	—	—	—	2	—	10	—	4	—	54	—	
源次		8	—	8	—	8	—	8	—	8	—	—	—	—	—	2	—	6	—	8	—	—	—	—	—	56	—	
宮内		6	—	—	—	—	—	10	—	—	—	—	—	10	—	10	—	2	—	—	—	—	—	14	—	52	—	
安次		8	—	—	2	—	10	—	10	—	8	—	4	—	—	—	6	—	4	—	—	—	6	—	—	8	50	
源古		4	—	—	8	6	6	—	10	—	6	—	—	—	—	10	—	—	—	—	—	—	—	2	—	22	30	
笠松		—	2	—	6	—	8	—	8	—	8	—	2	—	—	2	6	—	4	—	—	—	—	—	—	12	34	
藤右衛門		6	—	—	16	—	4	—	—	—	—	—	—	2	—	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18	20	
長作		6	—	2	—	6	—	2	—	8	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	6	—	—	—	32	—	
儀兵衛		—	6	—	2	—	6	—	10	2	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2	—	—	—	—	—	4	26	
その他		12	—	2	—	2	6	8	26	4	14	8	4	10	8	12	4	4	—	2	—	4	2	10	6	78	70	
合計		124	22	40	76	48	122	76	164	38	62	18	26	30	28	100	112	20	78	24	56	24	34	48	18	588	798	

(注)上欄その他は他村名あるいは表示外字名の記載があるもの、不明は肩書の記載がないもの。同字同名を同一人物として集計。辻家「木綿反入帳」より作成。
和とは和糸のみで織られた木綿、唐とは輸入糸糸を糸糸に用いた半唐木綿を示す。

[出所] 川上雅「明治前期泉州における木綿仲買の経営」、p.318・表5 (宮本又次編『商品流通の史的研究』ミネルヴァ書房、1967年)
・原史料は、辻家「木綿反入帳」。

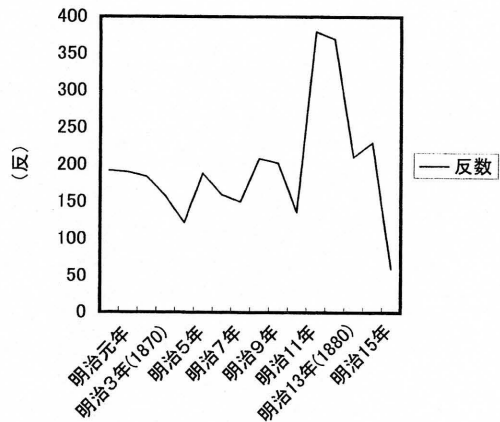
表6 徳兵衛家、販売先反数と主な取引先仲買商 [単位：反]

	村内	岸和田	その他	不明	合計	判明する仲買数	主な仲買 (括弧内は反数)
明治元年	48	48	96	0	192	6	吉井村・油屋才十郎 (48)、磯上村・万太郎 (48)
明治2年	32	118	40	0	190	8	岸和田・金屋 (40)、磯上村・治郎万 (40)
明治3年(1870)	8	168	8	0	184	7	岸和田・金屋 (40)、岸和田・中井 (36)、岸和田・鶴利 (36)
明治4年	0	158	0	0	158	4	岸和田・あみ嘉 (24)、岸和田・中井 (18)
明治5年	0	122	0	0	122	1	岸和田・ふじ定 (76)
明治6年	0	188	0	0	188	2	岸和田・ふじ定 (170)
明治7年	0	146	0	14	160	3	岸和田・ふじ定 (122)
明治8年(1875)	0	110	40	0	150	2	岸和田・ふじ定 (110)
明治9年	0	202	0	6	208	1	岸和田・ふじ定 (202)
明治10年	0	194	8	0	202	4	岸和田・ふじ定 (158)
明治11年	0	104	0	32	136	3	岸和田・ふじ定 (104)
明治12年	0	208	10	162	380	4	岸和田・ふじ定(208)、小瀬勘(134)
明治13年(1880)	0	0	0	370	370	1	ふじ徳 (370)
明治14年	0	0	0	210	210	1	ふじ徳 (210)
明治15年	0	0	0	230	230	1	ふじ徳 (230)

[出所] 岡田光代「幕末～明治前期における一農家の木綿生産」、p.44・表4 (大阪府立大学『歴史研究』第34号、1996年)

兵衛家と同じ泉郡の隣村、助松村の、紀州街道沿いの田中本陣である。この文書には、近隣十一ヶ村の物産を調査した物産表(明治八年以降)が残されており、南郡に隣接する泉郡の大まかな動向はつかめるのである。

現在のところ利用可能な史料は、この程度しかない。これらの史料からは、地域的なばらつきや、生産品が太口なのか細口なのかは判明しない。とはいえ、泉州地方全体の白木綿生産のおよその動向を把握するには足りるものである。



[出所] 岡田光代「幕末～明治前期における一農家の木綿生産」、p.38・表2 (大阪府立大学『歴史研究』第34号、1996年)より作成。

図3 明治元年～16年、徳兵衛家 木綿販売反数 (単位：反)

IV 輸入生金巾と泉州木綿の価格

さて、以上の史料のデータに基づく価格分析に入る。前田家の文書は明治維新の真っ只中で貨幣制度が混乱していた時期のもので、価格表示がすべて銀表示の匁となつていたので、そのままでは辻家のデータとはつながらない。そこで、これを円・銭法に換算する必要が生じる。ここでは、山本有造氏がその著書『両から円へ』の中で、布屋・山口吉兵衛家の勘定帳から推計したデータをもとに換算を試みた。換算比率は、慶応四年（明治元年）一月・一円〇九二匁、二月・一円〇九匁、三月・一円〇六五匁、四月・一円〇九三匁、閏四月・一円〇二匁、五月以降・一円〇二〇匁、明治二〇四年・一円〇二〇匁である〔徳兵衛家文書のデータは、岡田氏がすでに明治八、九年の円銭表示を基に指数化しておられるので、それを用いた〕。

一方、輸入金巾については、『横浜市史』及びその元のデータである『大日本各港輸出入年表』・『大日本各港輸出入半年表』などの貿易統計をもとに算出した。しかし、これらの貿易統計は、そのまま利用するわけにはいかない。建元正弘・馬場正雄氏らの研究¹⁶によれば、明治前期の貿易統計は、金貨国からの輸入は金円によって、銀貨国からの輸入は銀円で計上され、しかもその集計にあたっては、金円・銀円の実勢の乖離を無視して金円一円〇銀円一円の法定レ-

トが用いられた結果、銀円で統一した場合、輸入総額が過小評価になる。さらに、日本の貿易統計は輸出港積出価格（F.O.B. 価格）で表示されており、運送料と保険料を含めた輸入港到着価格（C.I.F. 価格）を算出する必要がある。これらを考慮したのが表8である。同表の輸入額は、まず各年次の運賃保険料比率を乗じ（一五〜一八%あたりで推移）、次に明治七（一八七四）年以降は、表7の金貨一円に対する銀貨平均相場を乗じることによって得たものである。

ところで、これらのデータから得られる輸入金巾の価格であるが、明治一〇年以前はデータとして『横浜市史』の貿易統計しか存在しない上に、下等・中等・上等などに分類されず生金巾として一括されている。そこで、半ば強引ではあるが、輸入金巾の中心が三巾金巾であったことを考慮し、品質の差異はここでは無視して、川勝推計¹⁷と同じ計算方法を採用し、明治二〇年まで連続して、一反当たりの平均価格を割り出した。平均価格であるから、おおよそ中等金巾に相当する価格となつている。また、こうして算出された価格は銀円表示である。前述の文書のデータから得られる和泉木綿の価格は紙幣表示であるから、銀円をさらに紙幣価格に換算する必要がある。かくして、前掲山本書所収の円銀一円に対する紙幣の毎月平均相場表¹⁸を用いて再計算した最終結果が、表9である。

表7 商品貿易（輸入）に関する金銀混計の修正 [単位：千円]

	修正前の輸入額			金貨1円に対する銀貨	修正済輸入額
	輸入総額(1)	対金貨国(2)	対銀貨国及相手国不詳(3)	平均相場(円)(4)	(2)×(4)+(3)=(5)
明治7(1874)年	23,462	14,042	9,420	1.073	24,487
明治8(1875)年	29,976	21,376	8,600	1.090	31,899
明治9(1876)年	23,965	15,827	8,138	1.163	26,544
明治10(1877)年	27,471	21,316	6,105	1.120	29,979
明治11(1878)年	32,875	27,233	5,642	1.178	37,722
明治12(1879)年	32,953	25,438	7,515	1.199	38,015
明治13(1880)年	36,627	28,964	7,663	1.194	42,246
明治14(1881)年	31,191	23,343	7,848	1.196	35,766
明治15(1882)年	29,477	20,460	8,986	1.191	33,354
明治16(1883)年	28,445	20,122	8,323	1.199	32,449
明治17(1884)年	29,673	19,822	9,851	1.199	33,617
明治18(1885)年	29,357	19,088	10,269	1.217	33,499
明治19(1886)年	32,168	20,799	11,369	1.245	37,264
明治20(1887)年	44,304	29,794	14,510	1.297	53,153

[出所] 山本有造『両から円へ』p.228・表6-7。原資料は、馬場正雄・建元正弘「日本における外国貿易と経済成長」の付表1（篠原三代平・藤野正三郎編『日本の経済成長』日本経済新聞社、1967年）であるが、本表は山本氏による、1874年と1886年のデータの再修正後のものである。

表8 生金巾輸入量・輸入額の変遷

	横浜		神戸		1反当たり価格(銭)	
	輸入量(yard)	輸入額(円)	輸入量(yard)	輸入額(円)	横浜	神戸
1868(明治元年)年	599,791反	1,775,649			26.6	
1869年	449,686反	1,966,164			39.3	
1870年	586,103反	2,037,904	164,035反		24.0	
1871年	1,148,171反	3,235,653	240,597反	763,589	25.6	24.0
1872年	812,038反	2,156,344	14,819,234	1,265,512	24.1	26.2
1873年	28,386,959	2,144,167	18,990,086	1,333,869	27.5	25.5
1874年	40,765,939	2,999,203	20,492,411	1,388,930	26.8	24.6
1875年	30,172,550	2,187,721	13,261,055	808,647	26.4	22.2
1876年	43,300,913	3,032,895	9,753,000	703,695	25.5	26.2
1877(明治10)年	26,968,111	1,855,377	8,118,144	489,217	25.0	21.9
1878年	21,633,120	1,473,085	12,876,174	931,812	24.8	26.3
1879年	43,711,547	2,861,093	18,231,524	1,351,279	23.8	27.0
1880年	33,835,440	2,262,817	10,110,687	715,790	24.3	25.7
1881年	29,778,592	1,966,047	8,983,846	670,672	24.0	27.1
1882年	43,232,071	2,811,509	6,159,687	469,111	23.6	27.7
1883年	19,059,268	1,187,923	4,461,531	286,962	22.7	23.4
1884年	12,406,473	718,278	6,880,971	425,925	21.2	22.5
1885年	20,139,402	1,151,699	9,051,532	527,047	20.8	21.2
1886年	12,829,131	752,141	7,156,878	419,184	21.3	21.3
1887(明治20)年	14,773,757	873,507	13,477,568	807,245	21.6	21.8

[出所] 『大日本各港輸出入半年表』及び『大日本各港輸出入年表』、『横浜市史』資料編2・日本貿易統計から算出。輸入額はすべて、表7の建元推計に従い、F.O.B.価格に換算し直してある。また、1反あたりの価格とは、日本式の1反あたりの価格であり、その算出方法は、川勝平太「明治前期における内外綿布の価格」に拠った。

表 9 和木綿・半唐木綿と輸入生金巾との1反当たり価格差対照表 (単位: 銭)

	価 格					価格差 (和泉木綿-輸入生金巾)													
	和(A)	和(B)	和(C)	和(D)	和(E)	(F) 半唐	(G) 徳生金巾	(H) 神戸生金巾	A-G	A-H	B-G	B-H	C-G	C-H	D-G	D-H	E-G	E-H	F-G
1868(明治元年)年	22.6			14.7			26.6		-4.0						-11.9				
1869年	35.9			24.9			39.3		-3.4						-14.4				
1870年	32.3			23.6			24.0		8.3						-0.4				
1871年	31.5			23.7			21.6	24.0	9.9	7.5					2.1	-0.3			
1872(明治5)年				25.7			20.5	26.2							5.2	-0.5			
1873年				26.5			26.8	24.9							-0.3	1.6			
1874年				25.7	36.5		26.5	24.4							-0.8	1.3	10.0	12.1	
1875年				26.0			26.4	22.2					-0.4	3.8	-0.4	3.8			
1876年				25.0			25.7	24.0					-0.7	1.0	0.3	2.0			
1877(明治10)年				27.0			25.0	21.9							2.0	5.1			
1878年	31.1			28.0			26.4	26.8		5.9	4.3				2.8	1.2			
1879年				33.0			24.6	27.6		6.1	3.1	10.4	7.4	8.4	5.4	5.4			2.7
1880年				36.7	45.0		33.3	26.2		11.9	10.5	20.2	18.8	14.2	12.8	12.8			8.5
1881年				48.2			39.6	28.4		23.8	19.8			20.6	16.6	16.6			15.2
1882(明治15)年				37.9	28.0		37.1	28.7		13.4	9.2	3.5	-0.7	14.5	10.3	10.3			12.6
1883年				24.6	22.0		23.7	24.4		0.9	0.2	-1.7	-2.4	9.3	8.6	8.6			

【出所】和 (A)：前田家文書／和 (B)：前掲川上論文所収・辻家文書／和 (C)：『泉大津市史』第4巻・田中家文書／和 (D)：前掲岡田論文所収・徳兵衛家文書／和 (E)：『明治7年府県物産表』／半唐：前掲川上論文所収・辻家文書／輸入生金巾：表8に同じ。ただし、そのデータは銀円表示であるので、さらに市場価格に近い紙幣価格に換算した。

(注) 田中家文書・徳兵衛家文書に登場する木綿は、和木綿・半唐木綿の区別がない。特に、徳兵衛家の場合には、明治10年より唐糸(輸入絹糸)の購入が本格化するもので、それ以降は和木綿・半唐木綿の混計であろうと思われるが、そのまま和木綿の欄に入れてある。

輸入金巾には上等・中等・下等の三種類があり、そのうち和泉木綿と競合関係にあったと考えられるのは下等金巾である。第一節でも述べた、高村氏の川勝氏に対する反論を同様に和泉木綿に対しても適用すると、次のようになる。すなわち、大阪商法会議所の明治一二年「海関税改正に関する答申書」の「下等金巾」の項目によれば、当時一反当たり二〇〜二三銭の相場であった下等金巾は、洋銀

相場が、従って紙幣表示の価格が、四割五分上昇するまで(すなわちその価格が二八〜三二銭になるまで)は売行不変で、それ以上になると泉州木綿一反当たり三五銭物に販路の一部を奪われるというのである。両者の価格差が八〜九銭以下に縮まらない限りは、伝統的嗜好よりは安価の方が優先されるといっているのである。ここでは、表9よりその検証を行うことにする。

同表A—G欄以下の価格差が示しているように、ここから言えることは、第一に、国内市場に対して輸入綿布の圧力の最も強かった明治初年代においては、輸入生金巾と泉州和木綿（在来手紡糸を原料とする）との価格差は、和泉木綿の方が生金巾よりも高い場合でも最大で明治四（一八七二）年の九・九銭（明治七年の府県物産表の数値は和泉木綿か河内木綿か判別できないので、ここからの価格差は無視した）で、明治元〜三年は、和泉木綿の方が生金巾よりも安価であるか、上述の価格差の範囲内である。第二に、表D—G欄及びD—H欄からは、逆に輸入綿布の圧力が弱まる明治一〇年代に和泉木綿の価格の方が高くなってその価格差が拡大し、二〇銭以上の差が開くことも見られる。しかしそれでも、あくまで価格差は九銭以下の範囲にとどまっていることの方が多く、和泉木綿の方が価格が安い年さえあったのである。前述のとおり、生金巾の上等・中等・下等品別の輸入比率はわからないが、一八七五年の英国領事報告によれば、一八七〇年代に神戸にもたらされた金巾の大部分は上海からの再輸出品であり、かつ下等品である²⁰。にもかかわらず表9に見られるように、和泉木綿と直接の競合関係にある（と言われる）下等金巾よりも泉州木綿の方が全体として価格が安いわけであるから、輸入綿布が圧倒的な価格差をもって国内市場を席卷したという古島・中村・高村氏の説は否定されねばならないだろう。

開港期〜維新时期における国産綿織物価格全体の動向としては、ま

ず黒船来航により嘉永期に一旦低落し、安政期以降貿易の開始にもなつて米価との相対価格（米価を分母に、綿織物価格を分子にした相対価格）が低落傾向を示し、その低落傾向は明治初期以降が顕著である。しかしながら在来綿織物業が全体として衰退しなかったのは、すべての在来綿織物業が輸入綿織物と直接的な競合関係におかれていたわけではなく、両者が異なった需要Ⅱ市場を対象としていたがゆえに、在来綿織物の市場が奪われなかったことと、技術的進歩による生産性の向上が見られたためであった²¹。このような在来綿織物業全体の動向を念頭におくと、表9の分析から得られる和泉木綿の動向はどのように解釈できるであろうか。

今述べてきたことは価格についての検討のみであるから、次は当然生産量の動向を検討しなければならない。生産量については明治初年については詳細なデータがないが、少なくとも谷本氏が述べているような明治初年における生産の減退という事実はないと考えられる。というのも、谷本氏は「堺市史料」における文久期の生産量約二〇〇万反という数値と、『泉州郡織物同業組合沿革誌』の明治初年の生産量約一〇〇万反という数値（表10参照）から、「和泉木綿は明治初年代には停滞ないしある程度の生産の減少を経験した」と結論づけられている²²。前者の史料は和泉国全体の、また後者の史料はあくまでも泉州郡に限られたものであり、さらに前者の史料は堺の木綿問屋の独占的な集荷に反対するという文脈のもとで

表10 和泉木綿の生産動向（単位：千反）

	同業組合データ	和泉国	(泉北)	(泉南)
1868年頃	1,000			
1873年		1,300①		
1874年		870①		
1877年	1,500			
1878年	1,500			
1879年	2,000			
1880年	2,000			
1881年	2,500			
1882年	3,000			
1883年	2,500			
1884年	2,500	1,984	293	1,692
1885年	3,000	1,515	282	1,233
1886年	2,500	1,815	602	1,213
1887年	2,500	8,217②		
1888年	3,000			
1889年	3,000	3,099		
1890年	4,000			
1891年	5,000	2,605		
1892年	5,000	3,724		

〔出所〕 谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』名古屋大学出版会、1998年、p.197・表4-1
 原資料は、『泉南郡織物同業組合沿革誌』及び、官庁統計（1873・74年は『府県物産表』各年版、1884・1885年は『大阪府勸業年表』7・8回、1886年は『大阪府農商工年報』9回、1887年は『大阪府農商要覧』、1889・91・92年は『大阪府農工商統計年報』12・14・15回）

〔注〕①和泉・河内の生産量。

②過大と思われるが、そのまま掲げてある。

作成された、争論関係の史料であるため、その数値も過大に記されている可能性が強い。また氏は、前掲岡田論文（図3）からも、明治初年の生産の停滞ないし減少がうかがえるとされているが、これもあくまで一農家の事例であり、産地全体の動向を反映しているかどうかは疑問である。いずれにせよ、和泉国全体で生産量が「停滞ないし減退」したと結論づけるのは早計であらうと思われる。では、和泉木綿が、明治一〇年代の前半に生金巾よりも高価であった時期もあるが、全体として生金巾に比べてこのように安価たりえた条件

は何か。当然これは生産性の向上ということになる。技術的な面而言えば、明治七〜八年頃から下機を改良したチョンコ機が登場したことがあげられるが、技術的側面の検討は本稿の課題ではないので、それはまた別稿に譲りたいと思う。

ただし、これらのデータにも注意すべき点がいくつかある。まず前述のように、表9E欄の明治七年『府県物産表』を用いた白木綿三六・五銭という数値であるが、この数値は実際の和泉木綿の価格よりも割高に算出されている。というのは、これはあくまで堺県全体（河内国・和泉国をあわせたもの）のデータであって、ここで言う白木綿には、地厚の河内木綿や和泉木綿のうちでも手拭地などが含まれるため、この数値は他の欄と比べて割高になっているのである。そのことは、同じ『府県物産表』の大阪府の数値からも明らかである。各産地の白木綿が集まる大阪府では、その平均価格は四四銭とかなり高いものとなっている。次に、表9に注記したように、泉北の徳兵衛家・田中家のデータには和木綿・半唐木綿の区別がない。前掲岡田論文によれば、徳兵衛家が岸和田や貝塚の商人から唐糸の購入を本格的に行うようになるのは明治一〇年以降であり、それ以降のデータには半唐木綿がかなり含まれている。

このような問題点があるとはいえ、全体としては、前述の大阪商法会議所の答申とは異なり、輸入生金巾と和泉木綿との価格差は九銭以内に縮まっていることが多かったのである。したがって、輸入

金巾と和泉木綿との間の競合関係は、存在したにせよ、通説によって言われてきたような激烈なものでは決してなかったと結論づけることができる。さらに第二節で述べたように、輸入生金巾と和泉木綿との間には、同じ薄手といえども相当な品質の差が存在したのであるから、輸入生金巾が必ずしも和泉木綿の細口が用いられていた着物の裏地にとつてかわったとは限らないのである。つまり、和泉木綿と輸入生金巾とは基本的に市場を異にしていた可能性があり、輸入綿布の「外庄」は和泉木綿に関しては存在しなかったという結論になる。

なお、本稿では和泉木綿の市場である、北陸・東北・北海道地方の市場動向の分析には立ち入らなかつた。和泉木綿の主たる販売市場は、『堺市史』等によれば、大坂・京都の他、北陸・東北・北海道である。これは北前船が堺や泉南に北海道産の魚肥（これは棉作の肥料となる）を運んで来た際に、帰りの積荷として和泉木綿を載せて行ったことによる。織豊政権期以前からの堺の豪商で、江戸時代から明治時代にかけて木綿問屋を営んでいた岸谷家の記録によれば、岸谷家の明治期の主たる取引先は、札幌市南四条の向井呉服店と佐渡島の本間商店である。また、同家の記録には、堺に集荷された和泉木綿は大阪商船で北海道へ送られていたことも記されており、明治二〇年代に入ってもまだなお北海道が市場であったことがうかがえる²³。この東北・北海道の市場の分析については、今後の課題で

あるが、金巾と和泉木綿の品質の違いが明確に存在した以上、両者の市場は異なっていたはずであり、そうであるがゆえに、大阪商船の函館航路を用いて、明治二〇年代になっても和泉木綿が北海道を独自の市場として存続・発達しえたと思われる。

このたび実証を試みた品質と価格による分析に加えて、別稿では市場の側面からも本稿の主張を裏づけてみる予定である。

注

(1) 古島敏雄『産業史Ⅲ』（山川出版社、一九六六年）

・高村直助『日本紡績業史序説』上（塙書房、一九七二年）

・中村哲『世界資本主義と日本綿業の変革』（同『明治維新の基礎構造』未来社、一九七一年所収）

(2) 川勝平太

・「明治前期における内外綿布の価格」（『早稲田政治経済学雑誌』二四四・二四五合併号、一九七六年）

・「明治前期における内外綿関係品の品質」（『早稲田政治経済学雑誌』二五〇・二五一合併号、一九七七年）

・「アジア木綿市場の構造と展開」（『社会経済史学』第五一卷・一号、一九八五年）

(3) 斎藤修・谷本雅之「在来産業の再編成」（梅村又次・山本有造編『日本経済史3・開港と維新』岩波書店、一九八九年所収）

・谷本雅之「幕末・明治期綿布国内市場の展開」（『土地制度史

- 学』第一一五号、一九八七年四月)
- (4) 高村直助「維新前後の『外庄』をめぐる一、二の問題」(東京大学『社会科学研究』第三九巻・第四号、一九七八年)
- (5) 谷本・前掲論文、六七頁、注(62)
- (6) 中村・前掲書、付表3
- (7) 岡田光代「近世泉州地方における在郷木綿仲買」(福山昭・武知京三編『社会経済の史的展開』松籟社、一九八六年所収) 六頁
- (8) 文久元年八月「乍恐口上」(泉州織出木綿売捌ニ付出入一件留)『堺市史料99』
- (9) 森山弘助『内地向・輸南向織物製造法』(名古屋・江口商店機料部、一九〇六年)二九―三四頁、四六頁
- (10) Irish University Press Series: British Parliamentary Papers, Japan, vol. 8 1887, Miscellaneous Series, No.49, "Reports on the Native Cotton Manufactures of Japan" p.12
- (11) 渡辺源治・小谷方明編『ふるさとの想い出・写真集・明治大正昭和・堺』(国書刊行会、一九八三年)六一頁[原典は『堺市史』続編・第五巻、八六〇―八六三頁「明治十四年・堺市木綿商組合之沿革」]
- また、『新潟日報』昭和四二年七月六日の記事として、佐渡ヶ島の「島屋」という廻船問屋が一八世紀末から明治一〇年代まで大坂と取引をしていたことが書かれている。さらに、明治三四年六月の堺市木綿商組合「商業調査」(堺市中央図書館所蔵)にも、大阪・京都以外の和泉木綿の主たる販売先として、北海道・東北地方が挙げられている。
- (12) 川上雅「明治前期泉州における木綿仲買の経営」(宮本又次編『商品流通の史的研究』ミネルヴァ書房、一九六七年所収)
- (13) 岡田光代「幕末〜明治前期における一農家の木綿生産」(大阪府立大学『歴史研究』第三四号、一九九六年)
- (14) 阿部武司「日本における産地綿織物業の展開」(東京大学出版会、一九八九年)第一章
- (15) 山本有造『両から円へ』(ミネルヴァ書房、一九九四年)二三八―二四三頁表7―2
- (16) 馬場正雄・建元正弘「日本における外国貿易と経済成長」(篠原三代平・藤野正三郎編『日本の経済成長』日本経済新聞社、一九六七年所収)
- (17) 前掲川勝「価格」五一―六一頁表5備考―比較・換算の方注(1)―
- (18) 前掲山本「一九九四」二二―二頁表6―2
- (19) 前掲川勝「価格」五一―八頁表5
- (20) IUP series: BPP, Japan, vol.5, Commercial Report, Hiogo and Osaka for 1875, pp.13~14
- (21) 新保博「幕末期・明治期の価格構造」(『社会経済史学』第三三巻一号、一九六七年)二〇―二二頁
- (22) 谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』(名古屋大学出版会、一九九八年)一九六―一九九頁
- (23) 堺市・岸谷家所蔵文書。これは、先の『堺市史』の記述や『新潟日報』の記事を裏づける重要な証拠である。

付記・岸和田市郷土資料室の春野文隆様には、史料の閲覧・コピーに多大な便宜をはかっていただきました。堺市の岸谷宏様、森田昌孝様、池田市の三本浩子様には、個人蔵の貴重な史料を閲覧・コピーさせていただきました。和泉木綿の会主宰の平山貴夫様（平山繊維株式会社）からは、復元した和泉木綿を見せていただき、当時の和泉木綿の品質について御教示いただきました。また、今回の論文には反映できませんでしたが、稻西株式会社の稲本義和様、村井清様からは貴重な史料をコピーさせていただきました。当時の近江商人の販路についても御教示いただきました。ここに記して感謝の念を表したいと思います。